

各地で話題の病害虫

マンゴーハダニ

学名: *Oligonychus coffeae* (Nietner)

英名: Tea red spider mite, Red tea mite

本種は1996年日本では初めて沖縄本島でマンゴウの葉表に寄生・加害しているのが発見された。体長、体幅は各々 0.429mm, 0.290mm内外で、体色は赤色のハダニである。

国内では沖縄県以外での採集事例は知られていない。海外では東南アジア、中東、アフリカ、アメリカ(フロリダ)、ハワイ、南米、オーストラリア、フィジー等の熱帯及び亜熱帯に広く分布して



沖縄県病害虫防除所提供

いる。寄主植物は極めて多くチャ、カンキツ類、モモ、ブドウ、コーヒー、クリ、ザクロ、オクラ等多くの重要作物が含まれる。インド、スリランカではチャ栽培が始まった頃からの重要害虫であるとされている。

本種の好適発育条件は温度が20~30℃、湿度49~94%、この条件下で年間の世代数は最大で22回である。

本種は、若葉より硬化した葉の表に多く寄生し、加害が激しい時や干ばつ時には葉の裏面や若葉にも生息するようになる。

現在のところ本種に対する登録薬剤はないため有効薬剤の探索が急がれるところである。

スジブトホコリダニ

学名: *Tarsonemus bilobatus* Suski

本種は、北海道・本州・四国・九州と広く分布し主に施設栽培野菜で被害が発生している。形態、被害症状ともにチャノホコリダニと似ているため肉眼での区別は難しい。寄主植物の範囲は極めて広くその中でも被害が顕著に現れるものは、キュウリ、メロン、サツマイモ等がある。本種による被害症状は、葉の萎縮、芯止まり等ウイルス病や葉害その他の生育障害に似ているため被害による



川村 満氏提供

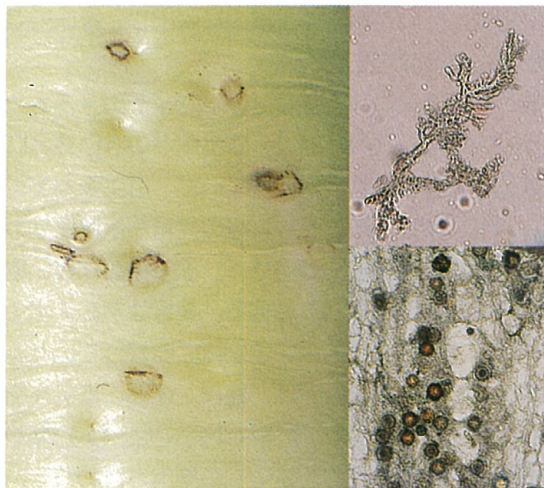
判断を誤る場合があるので注意が必要である。

本種の体色は雌雄とも褐色で、体長は雄が0.17mm雌が0.25mm内外である。生育適温は20~25℃で、飼育温度20℃で生存期間は17.3日、1雌当たり総産卵数は20及び25℃で約14個でありこれ以上の温度になると寿命、産卵数共に減少する。

本種は施設栽培で有機資材として施用される稲わらや籾がらが侵入源と考えられる。また被害発生圃場の土壌からも多数検出されることから定植前の、土壌消毒が有効である。植物体上の本種に対する有効薬剤として酸化フェンブタスズ水和剤、ケルセン乳剤、MEP乳剤等の散布薬剤が効果的である。

ダイコンわっか症 (通称)

1986年頃から神奈川県、徳島県を始め全国各地のダイコン栽培地で、ダイコン根部に直径5～10mm程度の黒色のリング状斑紋 (通称：わっか症) が発生し、商品価値を損ねることから大きな問題となった。本症状は、神奈川県ではUFO、オリソピックなどと呼ばれ、従来からある根部異常症とは異なるものであった。1995年に開催された農林



神奈川県農業総合研究所 小林正伸氏提供

水産省野菜茶業試験場主催の対策会議で、各地での症状はほぼ同一であることが確認され、名称は当面「わっか症」とすることとなった。

1997年、ダイコン白さび病が多発した年に「わっか症」也多発する傾向が認められたことから、神奈川県農業総合研究所の調査でダイコン白さび病菌 (*Albugo macrospora*) の接種試験を実施したところ、「わっか症」が再現された。病徴部には、多数分岐した菌糸、表皮の下に形成された分生孢子や卵孢子が認められ、白さび病菌の葉での形や大きさと同様であることが確認された。「わっか症」は白さび病の根での病斑の可能性が高いことが示唆されている。

現在、本病に対する登録薬剤はないが、対症療法的な薬剤による発生抑制方法が確立されており、塩基性硫酸銅水和剤、ジチアノン銅水和剤等の間引き直後からの3回散布が効果的である。

ハフサイ輪紋病

学名: *Asteromella brassicae* (Chevallier)
Boerema et Van Kesteren (完全世代: *Mycosphaerella brassicola* (Duby) Lindau)

1995年、鹿児島県加世田市の秋冬期ハフサイ (品種：千両) で、結球期後の葉に、褐色輪紋状の病斑を生ずる病害が発生した。1996年鹿児島県農業試験場で診断した結果、ハフサイ輪紋病であることが確認された。本病は我が国では1976年頃から岡山県で確認され、1990年に本病名が提案された。九州各県での発生は未報告であり、鹿児島県では



鹿児島県農業試験場 牟田辰朗氏提供

初確認である。

病徴は、初め葉に黒褐色の小斑点を生じ、その周辺が水浸状で暗緑色～黒緑色に変色する。病斑が拡大すると直径約1cmの淡褐色円形となり、暗褐色の分生子殻を密生する。分生子殻からは桃色粘質の分生子塊を溢出する。病斑を多数生ずると葉が黄変し、落葉する。中肋部が発病すると結球の外側から内部に接触的に伝染する。黒斑病、白斑病の斑点性病害とは、分生子殻を形成する点で区別できる。

本病の最適発病温度は15℃～20℃であるため5～6月、10～11月に発生が多い。本菌は1900年代初頭からキャベツ輪紋病として記載があり、ダイコン、ブロッコリー、カブ等にも感染する。

防除対策としては、マルチ栽培や寒冷紗被覆栽培を行い、雨滴による病原菌の飛散を防ぐ。収穫終了後の残渣は除去し焼却する。